

# 「幼稚園で経験したこと・感じたこと」についての親子の会話

## —会話に見られる特徴とその役割—

菅 眞佐子

(滋賀大学教育学部)

### 【目的】

子どもが自らの体験を再構成し意味づけていく過程には、周りの大人の考え方が少なからず影響している。大人は、子どもとの様々な関わりの中で、その文化が期待する方向に子どもの発達を方向付けていく。会話はそのような関わりを提供する場のひとつとも考えられる。とりわけ、幼児期の子どもは大人との会話を通して体験の再構成・意味づけを行う部分が大きいと考えられ、大人が会話をどのように進めようとしているのか、そこでは何に注目しているのか、といった事柄が子どもの経験の再構成や意味づけに大きな影響を与えていると考えられる。本研究では、幼稚園において子どもが経験したり感じたりしていることについてまずとりあげ、そのことについての会話が保護者との間でどのように行われているのか、会話することで何が達成されているのか、といった事柄を中心に検討する。

### 【方法】

**研究協力者** 大津市内の幼稚園に通う4歳児 55(男児 27, 女児 28)名、5歳児 57(男児 28, 女児 29)名の保護者。回収率は4歳児が 81%、5歳児が 84%であった。**手続き** 以下の5つの質問からなる質問紙を幼児を通じて保護者に配布し、「主たる養育者」に回答を依頼した。結果的には回収された全ての回答は母親からのものであった。**Q1**:「子どもさんが幼稚園で経験したことや感じたこと(以下、「幼稚園での経験」と略す)」について、回答者と子どもが普段どのくらいよく会話をするか、「非常によく話す(5)」から「全く話さない(1)」の5段階で評定を求めた。**Q2**:「幼稚園での経験」のうち以下の8項目についてどの程度よく話すか、Q1と同様の5段階で評定を求めた。①子どものした遊びや活動の内容、②子どもにとって楽しかったりおもしろかったりしたこと、③子どもが発見したり気がついたこと、④友達や先生が言ったりしたること、⑤子どもがいやな思いをしったり腹を立てたりしたこと、⑥子どもが興味を持ったことや一生懸命取り組んだこと、⑦子どもにとっ

てうまくいかなかったり困ったりしたこと、⑧友達や先生と子どもの間にあったやりとりや交流について。

**Q3**:「幼稚園での経験」について回答者が子どもと話すときにどのような態度で話すか 15項目 (Tab.1)について、「非常によくあてはまる(5)」から「全くあてはまらない(1)」の5段階で評定を求めた。15の項目は小松(2000)を参考に、想定された5カテゴリについて各3項目、すなわち、①会話の成立や発展のための援助に関する項目 (Tab.1の 2, 4, 12)、②問題解決につながる援助 (5, 9, 14)、③情報収集 (8, 15と、Tab.1にはあがっていない 10:自分にわからないことがあれば子どもに質問する)、④共有・共感(1, 6, 13)、⑤教育的働きかけ(3, 7, 11)であった。**Q4**:「幼稚園での経験」について子どもと会話することで以下の4項目がどの程度よく実現されているか、5段階評定を求めた。①会話することで(以下省略)、子どもが幼稚園でしている活動や内容がよくわかる、②子どもと、友達や先生との関係がよくわかる、③子どもが考えていることや感じていることがよくわかる、④自分の伝

Table 1 「幼稚園で経験したことや感じたこと」についての会話の内容

	F1	F2
<b>第1因子 教育・情報収集</b>		
5 子どもが気づいていない見方や考え方などについて、気づかせたり教えたりする	0.737	0.303
3 子どもの理解や知識の間違いを訂正し、正しい理解のしかたや知識を教えてやる	0.649	0.240
4 子どものことばを補うなどして、子どもの伝えたいことがきちんと表現できるように助けてやる	0.619	0.202
15 自分の知りたいことがうまく聞き出せるように、話を持っていく	0.589	0.325
8 自分の知りたいことを聞こうとして、子どもによく話しかける	0.562	0.043
2 子どもの話をまとめたり、適切なことばで言い換えたりしてやる	0.538	0.094
9 行き詰まっている原因について一緒に考えたり、気づかせたりする	0.528	0.443
7 会話のなかで、子どもの知らないことや新しい知識などを教えてやる	0.501	0.431
11 正しいことと悪いことがわかるように、説明したり教えたりする	0.500	0.467
<b>第2因子 共感・共有</b>		
13 子どものしたことを認め、ほめてやる	0.028	0.836
12 相づちを打ったり、「それで?」などとうながしたりしながら、子どもから話をうまく引き出していく	0.208	0.672
14 解決につながるやり方やふるまい方などを一緒に考えてやる	0.384	0.572
1 子どもがうれしかったり楽しかったりしたことを一緒に喜ぶ	0.140	0.565
6 子どものつらい気持ち、いやな気持ちを受け止め、なくさめたりカブげたりしてやる	0.402	0.502
因子の寄与率	37.1	7.4
累積寄与率	37.1	44.5

えたいことが子どもにきちんと伝わっていると思う。**Q5:「幼稚園での経験」**について子どもと会話をするのに以下の7項目がどの程度回答者の助けになっているか、5段階評定を求めた。①園便り、学級通信など、②降園時のクラス全体を対象とした担任の話、③担任や他の先生たちとの個別の会話、④保護者同士の話や情報交換、⑤幼稚園やPTAが開催する講演会や研修会、⑥教育や子育て一般に関わる、図書やテレビ等メディアからの情報(幼稚園外)、⑦子どもの兄・姉が同年齢の頃にあなたが幼稚園で経験したり知ったりしたこと(兄・姉がいる場合のみ)。

### 【結果と考察】

**1. 「幼稚園での経験」についてどのくらいよく会話をするか** Q1 で得られた評定値について年齢(4歳・5歳)×(男・女)の2要因分散分析を行ったところ、有意な主効果、交互作用はなかった。全被験者の平均評定値は3.54、標準偏差は.883であった。会話をする程度について、年齢、性による差はみられなかった。**2. 「幼稚園での経験」のうちどのような内容についてよく話すか** Q2の評定値に基づき年齢×性×会話内容(8)の3要因分散分析を行ったところ会話内容の主効果のみが有意( $F(7,749)=48.60, p<.001$ )で他の主効果、交互作用は有意でなかった。内容ごとの評定値の平均を Fig.1 に示す。幼稚園での経験の中でも、子どものした遊びや活動の内容、楽しかったりおもしろかったりしたこと、興味を持ったり一生懸命取り組んだことについては相対的によく話されているが、いやな思いをしたり、困ったりしたことについてはあまり話されていないことがわかる。**3. 子どもと会話をするときの親の態度** Q3の評定値に基づき主成分分析を行い固有値の変化の仕方から2因子解を採用、主因子法により因子分析を行った。因子負荷量が.50以上の項目を Tab.1 に示す。第1因子は、問題解決につながる援助、教育的働きかけ、会話の成立や発展のための援助、情報収集が複合的に含まれ教育・情報収集の因子、第2因子は共感・共有の因子と解釈された。各因子の因子得点に基づき年齢×性の2要因分散分析を行ったが主効果、交互作用ともに有意でなかった。4歳・5歳に共通した傾向として上記の因子が認められると考えられる。このような傾向は小松(2000)の結果とおおむね共通している。**4. 会話により実現されていること** Q4の評定値に基づき年齢×性×内容(4)の3要因分散分析を行ったところ、内容の主効果のみが有意であった( $F(3,324)=5.64, p<.001$ )。Fig.2 に示されるように、子どもが考え感じていることについての理解は相対的によく実現されているが親自身が

伝えたいことはそれほど伝わっていないと感じられているようだ。**5. 会話をするうえで助けになっているもの** Q5の⑦については有効回答数が全体で51しか得られなかったため、①から⑥についての評定値に基づき年齢×性×項目(6)の3要因分散分析を行ったところ、項目( $F(5,520)=51.01, p<.001$ )、年齢( $F(1,104)=5.18, p<.05$ )について有意な主効果が見られた。園便り、降園時の担任の話、先生との会話はおおむね助けになると評価されており、講演会やメディアを通じた情報はより低い評価となっている(Fig.3)。また、全体的に見て4歳児の保護者による方がこれらの項目がより助けになると評価されているといえる。なお、項目⑦についての平均値は4歳で3.73(標準偏差 1.28)、5歳で3.92(0.95)であった。

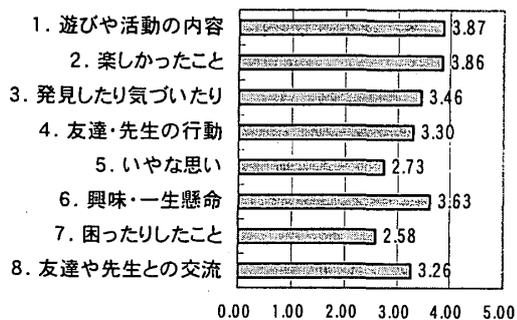


Figure 1 よく話す程度についての平均評定値

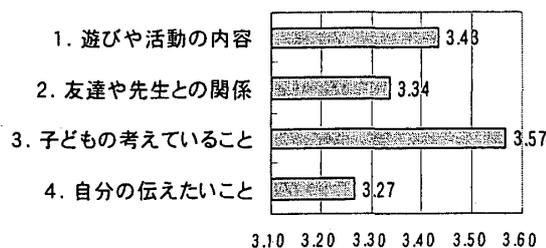


Figure 2 会話により実現されている程度

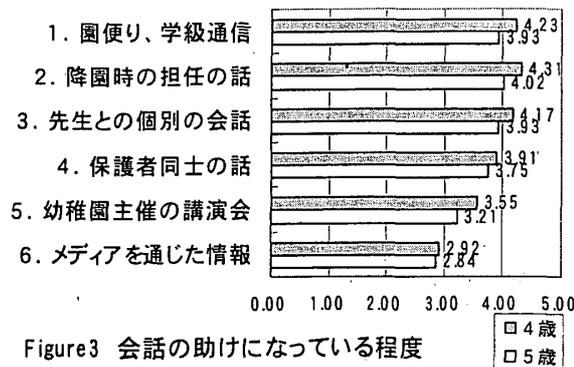


Figure 3 会話の助けになっている程度